

京都大学	博士(文学)	氏名	浅田晃佑
論文題目	ウィリアムズ症候群患者のコミュニケーション特性		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>ウィリアムズ症候群 (WS) は、7 番染色体長腕の微細欠失症候群で (7q11.23)、発生頻度の稀な神経発達障害である。WS 患者は、語彙能力(言葉の知識に関する能力)には WS 患者の精神年齢と比べてそれほど問題を抱えず、人と関わることに積極的で社会的であるが、日常生活では他者とのコミュニケーションに困難を抱えることが報告されている。</p> <p>第1章では、WS 患者における過去の研究を踏まえ、WS 患者の持つ特徴と本論文の仮説を述べた。言語・コミュニケーション能力の分野では、日常生活での意思疎通の問題が指摘されているものの、語彙や文法は精神年齢と比べて同等かそれ以上という結果があることから、こういった領域以外の能力、つまり、語用能力が WS 患者の日常生活での意思疎通の問題を生んでいる可能性が考えられた。しかし、コミュニケーション場面の分析における先行研究では、WS 患者のコミュニケーション能力の評価において肯定的な結果と否定的な結果が混在していた。WS 患者は実験場面での、対話者がどういう状態にあるかを比較的考慮する必要のない、自由に物事を話す状況(ナラティブ)では大きな問題が見られないのに対して、関係者へのアンケートや面接からは日常場面でのコミュニケーションの問題が報告されている。その一方で、同じ実験場面でも相手との会話の中で調整が必要な場合(例: 新情報を伝える、相手のニーズに応える)では WS 患者の問題が見られている。日常生活では、その都度相手のことを考慮する必要があり、会話の文脈も様々である。このような状況では、相手が必ずしも自分の意図したように自分の発話を理解してくれない、また、話をする時に相手の注意が自分に向いていないなどのコミュニケーションの齟齬が生じる可能性がある。つまり、日常生活では、文脈に合わせ他者の状況を考慮し意思疎通を行う能力である語用能力が重要とされるはずである。WS 患者がこの能力に問題を抱えていれば、多くの語彙や人との関わりの積極性など社会的に望ましい特性を抱えていても、コミュニケーションが成立しにくいということが起こり得る可能性があるだろう。以上の理由から、第一章では、これまでの研究ではほとんど検討されてこなかった、対話者の状況を考慮する必要のある文脈の中での WS 患者のコミュニケーション行動を検討し、語用能力に焦点を当て研究する必要性を主張した。更に、先行研究のまとめから、WS 患者の特徴の中でも、社会的認知に問題を抱える可能性があること、人への興味や関わりに対する積極性という社交性が高いことを示した。</p> <p>第2章では、WS 児が相手の誤解を修正するのかどうかを検討した。その結果、WS</p>			

児は全体としては健常児と変わらずよく話すものの自分の意図を明確にするような要求や拒否の発話が少なかった。また、特に、相手が言語応答によって誤解を示した際にそれを修正するように働くであろう要求と拒否の発話が健常児と比べWS児で少なかった。この結果は、多弁で社会的であるということと、意思疎通に困難が見られることというWS児の両方の特性が反映された結果であると言える。この章では、WS児のコミュニケーションが一般的な語用論の原則（関連性の原則：相手に対する新情報をできるだけ無駄な労力を割くことなしに伝えること）にあまり即していない可能性を議論した。加えて、WS児が発達初期に獲得されるコミュニケーション機能である命令・要求的機能と叙述・共有的機能のうち、主に後者に問題を持つ可能性が考えられた。また、その機能の問題に社会的認知能力が関連している可能性を議論した。しかし、この研究では、1つの問題が残された。それは、本実験では、相手と自分の意図したことを「共有」するために「要求」をするという手続きを用いていたため、WS児が単純に要求や拒否をすることが困難であった可能性も考えられるということである。実際、条件に関わらない要求・拒否の発話数の総数はWS児で健常児よりも少なかった。よって、第3章と第4章では、WS児の語用能力の問題が、発達初期の主要なコミュニケーション機能である命令・要求的機能と叙述・共有的機能の障害の主にとちらに依拠するのかに焦点を当て、それらの機能を別々の実験により検討した。

第3章では、命令・要求的機能に焦点を当てた。具体的には、WS児が相手に自分の欲しいものを要求することが可能かどうかを検討した。第2章のような他者の誤解の関わる複雑な状況ではなく、参加児の前で実験者が遊んでいるおもちゃを要求するかという単純な状況での行動を観察した。その結果、発話数を始めとする要求の量についてはWS児・健常児に差はなく、どちらも問題なく要求できていた。このことは、WS児は命令・要求的機能自体には問題を抱えていない可能性を示す。

第4章では、叙述・共有的機能に焦点を当てた。具体的には、WS児が相手の注意が自分の意図したところがない場合それを振り向けることをするのかどうかを検討した。その結果、健常児では相手の注意が自分の方がない場合、ある場合よりも多く発話することで注意を向けようとするのに対して、WS児ではある場合でもない場合でも発話量には有意な差はなく、むしろある場合により発話が多かった。この結果は、WS児が相手の注意を得て、対象を共有しようとする叙述・共有的コミュニケーションに困難を抱える、またはあまりしようとはしないということを示唆する。よって、第2章から第4章では、WS児の語用能力の問題の背景に、社会的認知との関わりが想定される叙述・共有的機能の問題が存在している可能性を指摘した。

第5章では、はい・いいえで回答する単純な質問に対してWS児が適切に回答できるかどうかを検討した。まだ追加の参加者が必要ではあるものの、その結果、WS児では健常児よりも、「はい」と答える傾向が強いことが示唆された。この結果においては、WS児が、「会話は情報を共有し合うものである」という会話の情報共有的性格の

理解またはその実践に困難を抱えるからではないかという解釈を行った。この解釈は、第2章・第4章で議論した、WS患者が会話の関連性の原則に依拠していないという語用障害に関する主張、また、コミュニケーションの叙述・共有的機能に問題を抱えるという仮説と一致する。更に、この結果は、WS児は、高度な社会的認知が必要とされるようなコミュニケーションだけでなく、相対的にそのような要素の少ない初期のコミュニケーションでも彼らの抱える問題の萌芽が見られるということを示唆する。

第6章では、まとめとして、WS児が会話における語用論の原則に即していない可能性、そしてその背景には社会的認知との関わりが考えられるコミュニケーションの叙述・共有的機能の問題、そして会話の情報共有的性格の理解や（理解にまでは至らなくても情報共有的な会話への参与を可能にするような）態度の獲得の問題がある可能性を指摘した。そして、WS患者のコミュニケーション特性として、（WS患者の他の能力と比べて）優れた語彙能力、高い社交性、そして、本研究で明らかにした語用能力の問題が相まって日常生活のコミュニケーションの問題を生んでいる可能性を主張した。以上のことを踏まえて、WS患者のコミュニケーション能力・社会性の発達の特徴、他の発達障害（自閉症）との共通点と相違点、コミュニケーション能力・社会性支援のための療育方法に関する示唆を行った。

(論文審査の結果の要旨)

ウィリアムズ症候群とは、7番染色体長腕の微細欠失症候群で、発生頻度の低い神経発達障害である。本論文は、ウィリアムズ症候群児（以下WS児とする）を対象に、巧妙な実験的手法に基づいた健常者との比較研究から、そのコミュニケーション特性を明らかにした、斬新で意欲的な論文である。

論文は、6章から構成されている。まず、第1章では、論者の問題意識が明らかにされる。先行研究を網羅し、これまでの知見を緻密に分析して、明確に問題を浮き彫りにした。すなわち、WS患者は、人への関心や人との関わりに対する積極性はあるものの、社会的認知に問題を抱える可能性を指摘したのである。このような問題提起は、世界的にもまだ例数が少なく、論者の斬新な視点を示すものである。

第2章では、実験者とWS児のやりとりの場面で、実験者が誤解をするような状況を設定し、WS児がそのような誤解を修正できるか否かが検討された。その結果、WS児は、総発話数は健常児と変わらないが、自己の意図を明確にするような発話が少ないことがわかった。こうした結果は、多弁であり社交的ではあるが、意思疎通に困難があるWS児の特性が反映されたものであると考えられる。良く練られた実験デザインにより引き出された結果である。実際、本結果をまとめた論文は、この領域の世界的権威である研究者から極めて高い評価を受けた。

続く第3章では、命令・要求的機能に焦点が当てられた。WS児が実験者に自分の欲する物を要求するか否かというシンプルな問いかけである。その結果、WS児は、健常児と変わらない要求の発話量を示した。すなわち、WS児は命令・要求的機能には問題を抱えていない可能性が示された。

第4章では、叙述・共有的機能に焦点が当てられた。WS児が、実験者の注意が自分の意図するところのない状況において、その注意を引くような行動を示すか否かが検討された。その結果、健常児では実験者の注意が自分に向かっていない場合では、自分に注意が向かっている場合よりも発話量を増やすということで注意を引こうとしたのに対し、WS児では注意が自分に向けられていても向けられていなくても、その発話量に差がないことが示された。この結果は、WS児が他者の注意を自分に向け、対象を共有しようとする、いわゆる叙述・共有的コミュニケーションに問題を抱えるのではないかという論者の仮説を支持するものである。論者の優れた洞察力がこうしたところにも現れている。

以上、第2章から第4章では、WS児の語用能力の問題を背景に、社会的認知との関わりが強く想定される叙述・共有的機能の問題が存在する可能性が浮き彫りにされた。

続く第5章では、「はい」「いいえ」で回答するような、比較的単純な質問に対して、WS児が適切な回答を示すか否かが検討された。健常児でも、年少であれば、このような質問に対しては、その質問が間違いであっても、「はい」と答える肯定バイアスを示すことが知られている。本実験の結果、WS児は健常児よりも、肯定バイアス、す

なわち、「はい」と答える傾向が強いことが示された。論者は、この結果に、WS児が、会話の情報共有的性格の理解や実践に困難を抱えるからではないかとの解釈を与えている。このことは、第2章から第4章で検討された、WS児がコミュニケーションの叙述・共有的機能に問題を抱えるという論者の仮説と見事に一致するものであり、本論文の論旨を補強する。

第6章では、あらためてWS児のコミュニケーション特性が記述された。その特性とは、以下の2つである。(1)WS児は、比較的優れた語彙能力を有し、高い社交性も合わせ持つこと、(2)しかしながら、コミュニケーションの叙述・共有的機能に困難を抱え、その背後に社会的認知の問題の存在があることなどである。さらに、本章では、こうしたことを踏まえ、WS児の療育方法に関する示唆も行い、本論文をさらに意欲的なものにしていく。

もちろん、問題点もないわけではない。調査委員の一人が指摘したように、WS児が示すようなコミュニケーション特性のメカニズムに迫る実験が組まれていないことがあげられる。メカニズムを明らかにすることにより、より有効な療育方法の提言も可能になると思われる。しかしながら、こうした点は、新しい視点からの意欲的な挑戦においては許容できるものであり、むしろ今後の課題といえよう。論者の豊かな発想により、必ず解決できるものとして今後の展開を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年2月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。